

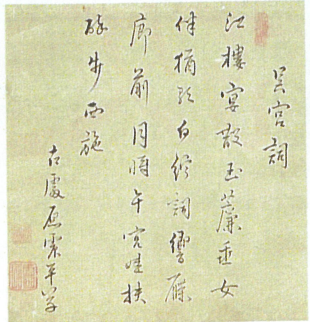
思いは厲し！李白のごとく

やまぐちヨウジ

1 七言絶詩

吳宮詞

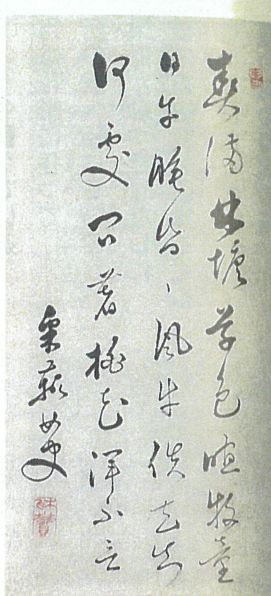
江樓宴散玉簾垂
女伴猶歌白紵詞
響屬廊前月將午
宮娃扶醉步西施



江樓宴散じて、玉簾垂る
女伴猶ほ歌ふ白紵詞
響は厲し廊の前、月は將に午せんとす
宮娃醉に扶り、歩西施のごとし

(注) 西施は、越王勾踐の愛妾。越王勾踐は、絶世の美女西施のうつくしさに溺れ、これが国の存亡の危機になる。その機に乗じて越は呉をせめて陥落させ、西施は取り戻された。美女の喩えとして使われる。

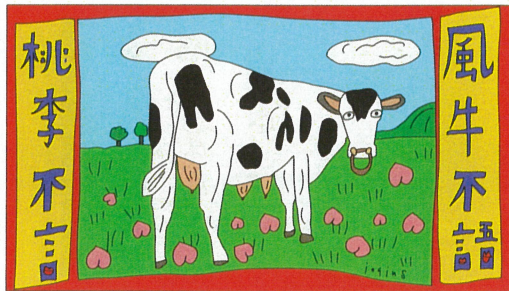
宴は終わり
玉の簾も垂れている
芸者は唱う白紵の詞
響きは廊下にこだまして
月は中天に上り行く
お付きの美女も酔ってフラフラ



春満ち林塘草色喧
牧童亭午睡昏昏
風牛佚去知何処
問着桃花渾不言

春満ち林塘草色喧びすし
牧童 亭に午睡す昏昏たり
風牛佚し去る 知るや何れの処ぞ
問着へども 桃花渾として言わず

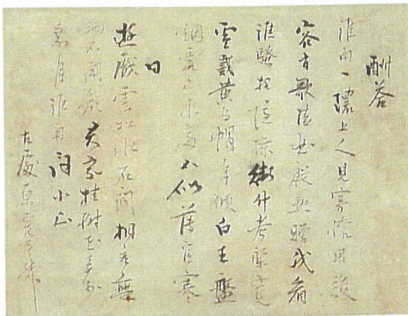
春がいつぱい
川辺の草が目映る
牛飼いの子供は
お昼寝グーグー
オンナを誘って
アイツはどこへ
行ったのか
訊いても答えぬ桃の花



酬答

淮南一環上人見寄懷同韻

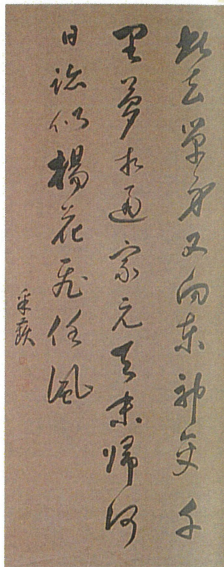
客有歌清曲
殷然贈我看
淮騷把隨操
衛什考槃寬
靈戴黃鳥帽
月傾白玉盤
烟霞山水處
不似薄官寒



日
遊戲雲松水石間
相看無物不開歡
君家桂樹花多少
乘月淮南問小山

淮南の一環上人、懷を寄せらるるに同韻す
客に清曲を歌うあり
殷然として我が看るに贈る
淮騷把りて隨操す
衛什は考槃の寛き
靈は黄鳥の帽を戴き

2 七言絶句



此去單身又向東
神交千里夢相通
家元天末歸何日
跡似楊花飛任風

此に去つて單身又東に向ふ
神交千里夢相ひ通ず
家は元より天末、帰ること何れの日ぞ
跡は楊花の風に任せて飛ぶに似る

たった一人でまた東
心は千里の果ての夢の先
またいつ
故郷に帰つて来れるやら
私の足跡……
柳の花が風に吹くの似ているわ

月は傾く白玉盤
烟霞山水の處
薄官の寒なるには似ず

曰く

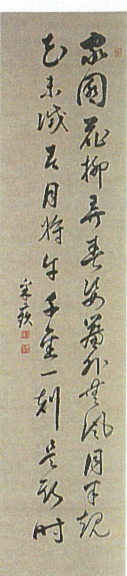
雲松水石の間に遊戲し
相ひ看るに物として歡びを開かざるなし
君が家、桂樹の花多少ぞ
月に乗りて淮南、小山を問ふ

中国からやつて来た一環上人が
懷いを寄せられたものに同韻する

客に清の詠うものがある
見るよ、見るよとさかに言う
そして『楚辞』の歌を見せるのだ
守るべき隠遁の地はくつろぎのあること
山の上には雪が残り
月は白玉のように輝いている
霞たなびく山水の景色
私のような下つ端役人には似合わない

山水画のようなところに遊び
見るものすべてが喜びとなる
桂は花をつけたかい？
月に乗って君のところを訪ねよう

3 七言絶句



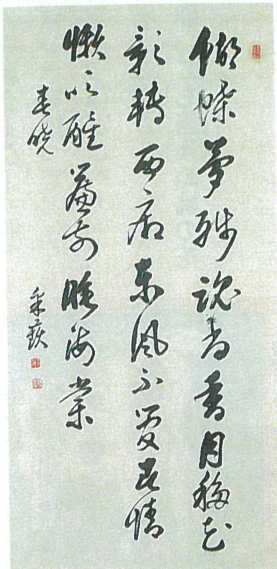
家園花柳弄春姿
簾外無風月半現
花未識春月將午
千金一刻是斯時

家園の花柳春姿を弄ぶ
簾外無風 月半は現わる
花未だ識らず 春月將に午せんとす
千金一刻 是れ斯の時

家も国も花も柳も
春に戯れ
簾の外は風もなく
そして半月が現れる
花はまだ
お昼が来たことなど
知らない様子
ああ
一刻値千金っていうのは
こんな時！



4 七言絶句



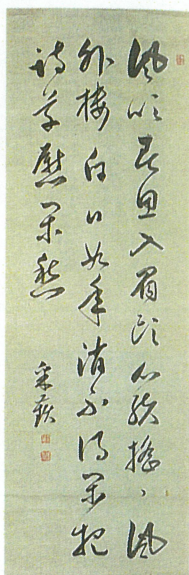
胡蝶夢殘魂尚香
月移花影轉西廂
東風不管春情懶
吹醒簾前睡海棠

胡蝶の夢、残魂尚は香る
月は花影を移り、西廂に転ず
東風管まず、春情懶し
吹きて醒む、簾前海棠に睡るを

胡蝶の夢
そのわずかな名残が
香っている

月は花影に移って
西の廂へ転じていく
東風がひっきりなしに
春の物憂さを連れてくる
酔いも醒めるわ
簾の前の海棠の花

6 七言絶句

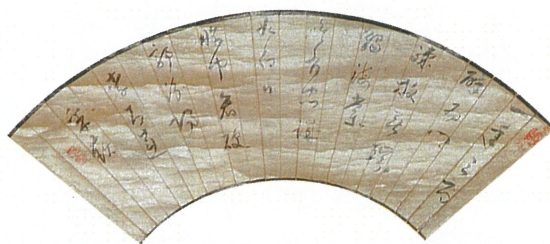


風吹春思入眉頭
心結搖搖風外樓
白日如年消不得
閑把詩草慰閑愁

風吹き、春思眉頭に入る
心は結ぶ 揺揺たる風外楼
白日年の如く消えて得ず
閑かに詩草を把りて閑愁を慰む

風が春の匂いを
眉毛に告げる
心はユラユラ
風の外の楼台へ
一日はあつという間に
過ぎて行く
閑かに詩草をとって
物憂い愁いを慰める

5 扇面詩歌貼交

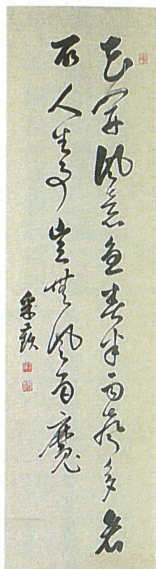


一年三百醉為鄉
疎放無端独海棠
唯有忠誠如白日
睡中看破郭汾陽

一年三百酔いて郷と為す
疎放無端 独り海棠
唯だ有り、忠誠白日の如き
睡中看破す郭汾陽

(注) 郭汾陽、字は子儀は中国・唐代の武將で、
を治めたことから郭汾陽ともよばれる。子供や孫
に恵まれたため、「子孫繁榮」や「長寿」を表す
人として使われる。

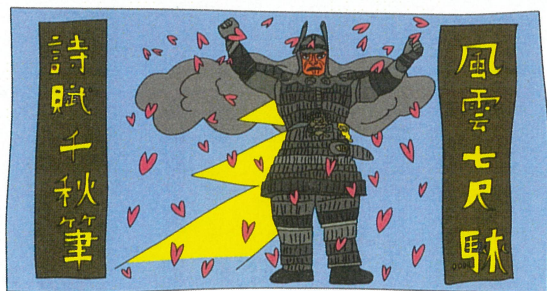
7 五言絶句



花開風意急
春半雨声多
看取人生事
豈無風雨魔

花開き風意急なり
春半ばにして雨声多し
看取す 人生の事
豈に風雨の魔無からん

花が開いたのに
風が吹く
春は半分
雨さえ多い
まるで
人生みたいよね
どうして邪魔が
入るのか



一年中酔っぱらって
故郷を思う

荒れたところに
海棠の花が咲いている
ただ忠誠の心だけは
変わらない

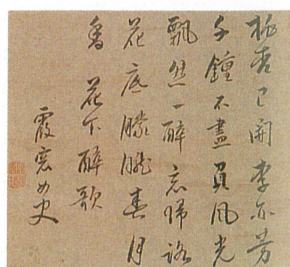
眠りのなかで
郭汾陽の故事を思い出す



鶯の都に出でん
中宿に
かさばやと思う
梅咲きにける

蓮月

8 七言絶句



花下醉歌

桃李已開李亦芳
千鐘不盡負風光
飄然一醉忘歸路
花底朦朧春月香

桃杏已に開き李も亦た芳し
千鐘尽きず風光を負う
飄然として一たび酔えば帰路を忘れ
花底朦朧として春月香る

桃や杏の花は開き
スモモだつて芳り立つ
鐘が鳴り
風や光が追いかける
飄然として一杯飲めば
帰りを忘れ
花の下は朦朧とし
春の月が香り立つ

9 七言絶句

陰蟲和雨一燈青
独夜愁人側耳聽
青想雲郎西入蜀
声声聰是雨淋鈴

陰蟲和雨一燈青
独夜愁人側耳聽
青想雲郎西入蜀
声声聰是雨淋鈴

陰蟲雨に和し一燈青
独夜愁人 耳を側て聴く
青想雲郎 西のかた蜀に入り
声声聰て是れ雨淋鈴

雨が降り
陰蟲は青い燈火となつて
消えていく
独り寝の夜
外の音に耳を寄せれば
風来坊の雲は
西の方に走り去る
聞こえて来るのは
鈴のような雨の音



八月十六夜同杏坪先生淡堂賞月
笑看窓紙明

啞啞宿鴉驚
風末雲無跡
松間月有声
茶從陸翁品
詩重謝公清
酒渴寒泉影
煎來欲解醒

笑いて看る 窓紙の明らむを
啞啞 宿鴉驚く
風末 雲は跡無く
松間 月に声有り
茶は陸翁の品するに従い
詩は謝公の清きを重んず
酒渴 寒泉の影
煎来りてを醒を解かんと欲す

(注) 謝公は南齊の謝朓。聖麗な詩風として知られる。李白もまた彼に私淑していたと言われる。

采蘋先生
八月十六夜同杏坪先生淡堂賞月
笑看窓紙明

10 七言律詩

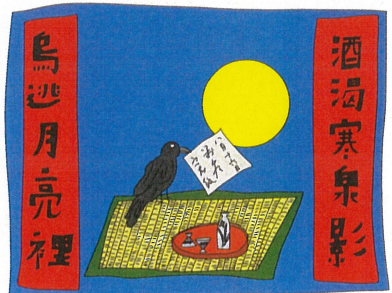
緑樹森々 昼亦た涼し
煎茶一椀 余香有り
声名已に熟し 新旧の如し
暗語 何ぞ短と長とを論ぜん
空翠 階に滴り、天 雨らんとす
明窓に酒を把れば客郷を忘る
若し君が輩 孤独を憐むにあらずんば
争か清酣結腸を解くを得ん

緑樹森々 昼亦た涼
煎茶一椀 余香
声名已熟新如旧
暗語何短与長
空翠滴階天欲雨
明窓把酒客忘郷
若飛君輩憐孤独
争得清酣解結腸

緑樹森々 昼亦た涼し
煎茶一椀 余香有り
声名已に熟し 新旧の如し
暗語 何ぞ短と長とを論ぜん
空翠 階に滴り、天 雨らんとす
明窓に酒を把れば客郷を忘る
若し君が輩 孤独を憐むにあらずんば
争か清酣結腸を解くを得ん

八月の十六夜、杏坪先生と茶人の家、
淡堂で月を賞でる

笑いながら障子に漏れる
明かりを看れば
宿守りカラスが
カーと鳴く
風もなければ
雲の通つた跡もなく
松の間に
ただ月の音が
聞こえる
お茶を評すると言つても
陸羽の受け売り
詩は謝朓の清逸さ
酒で喉が渴き
見れば冷たい泉の水
お茶でも煎れて
酔いを醒まして
しましましょう



青々とした木々
昼間も涼しい
煎茶を一椀
香りが残る
已に名も熟れたお茶のこと
新茶とはいえ旧き味わい
どうして短所や長所が言えようか
空の翠が滴るように
いまにも雨が降る様子
明るい窓に酒をとれば
客は故郷を忘れてしまふ
孤独を紛らわすためじやなきや
酒はなんの役にも立たないわ

11 五言律詩

八月十六夜同杏坪先生淡堂賞月
笑看窓紙明

呈
采蘋先生

男子難当。君彩毫文章滾、若奔瀟。魚潛深水影、
雖伏鶴唳九臯声甚高。是為雄心溢皮骨。曾無霜色。
入顯毛育英知得功。方就門下濟濟多耆髦。
長光太郎再拜
采蘋先生に呈す
男子すら当り難き君の彩毫。文章滾滾として奔瀟
の若し。魚は深水に潜み、影伏すと雖も、鶴唳九
臯声 甚だ高し。是れ雄心 皮骨に溢ると為す。
曾て霜色 顯毛に入ることなし、育英知得功方に就
く。門下濟濟として耆髦多し。

(注) この文を書いた長光太郎は号を三洲(一八
三二—一八九五)という学者・書家。大分の生ま
れ。長梅外の子。本名は長谷茂、別号に秋史。漢
詩人広瀬旭莊の門下で詩書画を能くする。維新後
は大学少丞・東宮侍書等を歴任した。

男でさえも難しい、君の美しい筆。
文章のよどみなさ、まるでほとばしる波にも似る。
魚が深い水に潜み、影さえ見えなとは言え、
その名聲は高い鶴の声が聞こえるようなもの。
雄々しい心が全身から溢れ出る。
まだ白髪もない若い時の勉強のたまものである
う。門下も多く誉れが高い。

12 美人画

画 吉嗣梅仙 賛 原采蘋



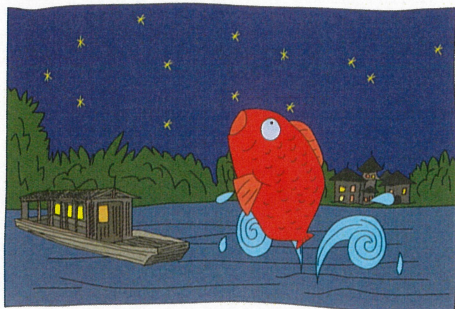
風神高邁自然才
歌以界中第一魁
不独三弦称艶妓
拇師又旧座客来

風神高邁自然の才
歌は以つて界中第一の魁
独ならず 三弦艶妓を称すと
拇師 又旧座客来れり

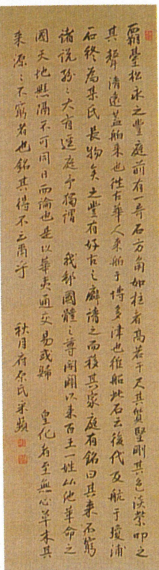
どこから来たのかこの才能
歌がうまいのは第一級
三味線だけで
艶ある芸者とは言わなければ
そっぴや師匠も
流行つていたつけ

(注) 謝公は南斉の謝朓。聖麗な詩風として知られる。李白もまた彼に私淑していたと言われる。

湖水は空と
一緒になつて
なだらかな線となる
霜が落ち
柳の葉が
軽く揺れ動く
月の下の舟は
まるで天の上
橋を渡る人は
鏡の中を行くみたい
寒さが漂い
魚が水から躍り出る
雲いっぱい
星はまばらに鵲の声
酒を飲んで
仙人のいるところを
望み看れば
詩は謝朓のもののような
清らかさ



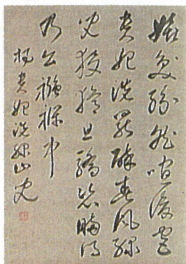
13 松永之豊石銘文



霸臺、松永之豊の庭前に一奇石あり。
方、角にして柱の如きものなり。
高さ、若干の尺。
その質堅剛、その色淡紫。
これを叩けば声、清遠。蓋し舶来なり。
往古の華人、博多の津に来舶せるや。
此石を船に維^つぎて云う、後代瓊浦に航するに及ば
んと。
石、終に某氏の長物となる。
之豊好古の癖あり。
之を請いて後、其の家に移す。
庭に銘ありて曰ふ。
其れ、来たるや窮まらず。
諸説紛々として大いに逕庭あり。
予、独謂へらく。
我が邦、国体の尊きこと、開闢以来百王一姓、他
の革命の国に比すれば天地懸隔、同日にして論ず
べからず。
是を以て華夷、交易を通じて或いは皇化を帰せん
とするも、草木に心することなきに至る。
其の来源の窮まらざるものなり。
銘、其れ爾りと云わざるを得んや。

15 菊図

画 二川玉篠 賛 原采蘋



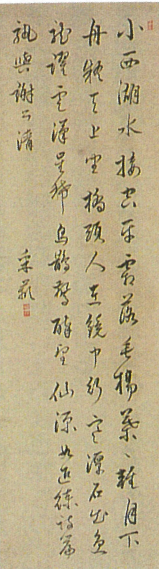
嬉笑紛然喧後宮
貴妃洗羅醉春風
緑史狡猾且驕恐
胸得乃公襴襟中

嬉笑紛然として後宮に喧し
貴妃羅を洗い春風に酔う
緑史狡猾且つ驕恐
胸に得、乃公襴襟の中

美しさ乱れる後宮に
楊貴妃はうすぎぬを洗い
春風に酔う
安禄山はそこに押し入り
次の朝には恐怖だけ
頼りにするのはあなた(玄宗)だけ



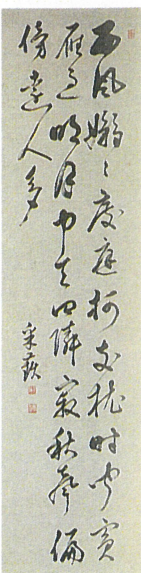
14 七言律詩



小西湖水接空平
霜落垂楊葉葉輕
月下舟擬天上坐
橋頭人在鏡中行
寒漂石出魚龍躍
雲漢星稀鳥鵲驚
醉望仙源如匠練
詩篇孰与謝公清

小西の湖水 空に接して平らかなり
霜落ち 垂楊 葉葉として軽し
月下の舟 天上に坐するに擬たり
橋頭人の在 鏡中を行くがごとし
寒漂い 石出で 魚龍躍く
雲漢 星稀れにして 鳥鵲驚く
酔いて仙源を望めば匠練の如く
詩篇は孰^{たれ}と与にす 謝公の清

16 七言絶句



西風嫋嫋渡庭柯
支枕時間雁雁過
明月中天四隣寂
秋声偏傍遠人多

西風嫋嫋 庭柯を渡る
枕を支て時に賓雁の過ぐるを聞けば
明月中天し四隣寂かなり
秋声偏傍遠人多し

西からの風が
庭を渡る
枕をそばだてて
雁が過ぎるのを聞けば
明るい月が中天に
まったく人の声も
聞こえない
ただ
秋は昔の人が
偲ばれる



17 七言絶句

人間大夢百年中
何事紛紜辨異同
彼我相生小成道
是非亦識一無窮

人間大夢百年中
何事紛紜辨異同
彼我相生小成道
是非亦識一無窮

人間大夢百年の中
何れの事を紛紜として異同を辨ぜん
彼我相い生じて小しく道を成す
是非亦た識る一無窮

夢を見たつて
人間どうせ百年余り
ゴチャゴチャと
あれこれ言つても
どうにもならぬ
どうせどつちも
小さな道を歩むだけ
是非を越えて
ひとつの無窮を
知るべきよ

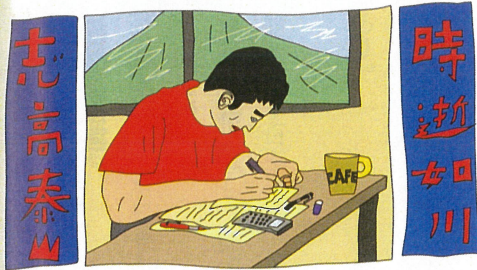
18 七言絶句

日月滔々不可留
人間宿志動難酬
青年光景須珍惜
勿為子孫学焉半

日月滔々不可留
人間宿志動難酬
青年光景須珍惜
勿為子孫学焉半

日月滔々として留むべからず
人間 宿志 動もすれば酬い難し
青年光景須らく珍惜すべし
子孫の為に学焉 半ばにすること勿かれ

月日は滔々と
流れて行く
人はなかなか
志を全うすることが
できないもの
若い人よ
時間を惜しみなさい
そして学問を
中途半端には
しないこと！



19 七言詩屏風

詩原古処 書原采蘋

千年江上白雲多
西風嫋嫋秋水波
我越高弦吟夜月
知他清怨泣湘妃

千年江上白雲多
西風嫋嫋秋水波
我越高弦吟夜月
知他清怨泣湘妃

千年 江上白雲多し
西風嫋嫋 秋水波
我越きて 高弦夜月を吟ぜば
知る他の清怨、湘妃を泣かしむを

(注) 湘妃とは、舜帝の妃・娥皇と女英の二人のこと。舜帝を慕つて湘水に身を投じて、川の神(湘靈、湘神)となったという。『楚辞』に「楚客欲聽瑤瑟怨(楚の国から来た人は、湘妃の奏でる瑤瑟のものの悲しい調べを聴きたいとおもった)」という詩がある。
千年変わらぬ川の上、白い雲が湧き上がり
秋の西風に波が立つ
高い弦を鳴らして月を詠おう
すれば湘妃の哀しい涙も分かるもの

知他清怨泣湘妃
乘醉扣舷唱九影
山似蒼梧秋不斷
金屏七十二青螺

知他清怨泣湘妃
乘醉扣舷唱九影
山似蒼梧秋不斷
金屏七十二青螺

知る他の清怨 湘妃を泣かしむ
乘りて酔い 舷を叩いて九影を唱えは
山は蒼梧 秋の断たざるに似たり
金屏 七十二の青螺

(注) 九影は、『楚辞』の中に詠われる「九影瀑」のこと。また青螺は、遠い風景に山が重なって見える情景を言う。この言葉もまた『楚辞』に現れる。

湘妃の哀しい涙を知つて
酔いに任せ舷を叩いて九影を唱う
山は蒼い梧の木が続く
まるで金屏風の中の青い山々

金屏七十二青螺
秋色横天落築河
一葉輕舟心不繫
西風明月与如何

金屏七十二青螺
秋色横天落築河
一葉輕舟心不繫
西風明月与如何

金屏 七十二の青螺
秋色 天に横たわり築河に落つ
一葉の輕舟 心繫ならず
西風明月与に如何

金屏風の中の青い山々
秋色に天が横たわり河となる
一艘の小さな舟は頼りなく
西風と明月の間に彷徨っている

西風明月与如何
故人先人側弁我
實雁不知至千年
江上白雲多

西風明月与如何
故人先人側弁我
實雁不知至千年
江上白雲多

西風明月与に如何
故人 先人側に我を弁ず
實雁 千年に至るを知らず
江上に白雲多し……

西風と明月をどうすればいい
懐かしい場所、懐かしい人と我
雁は千年という年月を知りはしない
川の流れの上を白い雲が湧き上がる……

先人旧製 劣女采蘋敬書

11は財団法人 龜陽文庫 能古博物館
それ以外は福岡市博物館所蔵

(山口謡司 大東文化大学助教授)
(写真 石丸洋 九州歴史資料館)